

---

# 歪な私は悪魔の彼に拘まった

いっしゅ～

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歪な私は悪魔の彼に拘まつた

### 【Zコード】

Z0476P

### 【作者名】

いっしゅく

### 【あらすじ】

「お前は、俺の側にいる。いいな  
その言葉から、私の地獄が始まった

閉鎖された排他的な街に生まれた不遇過ぎる女子高生が、ある一人の男子高校生に出会ってしまったことから始まる怒涛の超オレ様系ストーリー

いつどんな問題を持つてくるか分からぬ悪魔のよつた彼に付き従いつつ、彼女は一体どんな毎日を送るのか？

既にプロのシナリオライターとして活躍する彼の相棒、仲間内の情

報を集めまくる」とに心血を注ぐ情報屋、生田斐はいじられる」と規定された漫画家志望などなど、そんな個性的な面々に囲まれつつ、彼女の不遇をさりに越えた田舎ぐるしい仕事が繰り広げられます

あんたら本当高校生かよー」とツッコミたくなるような常軌逸脱系バラエティをお楽しみくださいー。

## 第一話 歪な私は悪魔の彼に捕まつた

「おー、ちゃんと行けりやば。見つかつたらヤバい」

「だな。もう十分楽しんだし。ひひつ」

「……でも、ここにひづつあるへー 応写真撮つたナゾ」

「あ？ 大丈夫だろ？ いつなう。だつてこいつ、こじらじゅ有名なう EXマシンだしよ」

「えつ？ こいつがあのつへえへ、それなら確かに安心だな。はははつ」

「実際俺も、これでもひづ回田だしよ。だから氣にすんなつて」

「おいつー、まことに！ 人が来た。そつそと行くぞー。」

「おー、おいつー。」

「おーーーお前もそつそと来いつてー。」

「大丈夫だつて。気にしすぎなんだよお前り。つと、そんじやなー、またよひしぐうー。はははははつー。」

などといつやり取りがあつて、よつやくその不快な笑い声が私から遠ざかつて行つた

けれど私は、その場に起き上がる」とから出来ず、ただ正面にあ

る歪んだ空を見続けていた

手には力が入らず、足腰も「つ」とを聞かない

膣の中は、今もドロドロとした精液が蠢き、たつた今まで入つていた奴らの肉の塊の感触が残つていてる気がした

つい、思い出していく

私はこれで、もう何度も犯されたことになるのだろうか？

もつこれで、何人の脣をこの体に受け入れてしまつたのだろうかと

・

考えるまでも無い

何故なら私は、その答えを知つている

いつどこで何時何分に、どこの誰に何度も射精されたのかも分かつて  
いる

全部の回答を、私は覚えているのだ

覚えていたくなくても・・・覚えてしまつていてるのだ

前に読んだ本に、サヴァン症候群のことが書かれていた

もしかしたら、私もその部類に属している人間なのかも知れない

ある一点の能力が特質している代わりに、何か人としての大事なも

のを失っている、どこか壊れてしまったような人達と・・・

犯された草むらを出て家路に着く

今日は幸い、制服へのダメージは少なく、ブレザーとブロウスのボタンが無くなってしまっただけだった

おかげでそんなに立つことなく、家まで帰り着くことが出来るだろ

確かに、ブラの紐が引きちぎれてしまったのはどうにもならないが、それくらいなら代えはあるし、見た目的に問題ないなり、さほど気にするようなことでもない

2回目と4回目と5回目以外は完全に服が破られてしまっていたし、3回目と7回目に至っては下着さえ持つていかれた

その時はさすがに困り果てて、結局携帯で親に連絡して事なきを得たわけだけど、それらに比べれば今回のはまだマシと言えるだろう

それにもしても、何とも困った噂が広まっているらしい

どうやら私の知らないところでは、私はすでにSEX中毒のような扱いになっているみたいだ

この分だと、近いうちにまた襲われてしまうかもしない

昔から襲われたことなんてザラだつたけれど、さすがに頻繁になり過ぎるのは耐え切れない

何度も何度も自分の体を汚されるのは、やはり堪える

もういい加減、何か手を講じた方がいいかもしれない

「はっ . . . でも他にできるつづりのよ . . . 」

これでも今まで、私に出来る限りの手はすべしてきてるのだ

親にも警察に先生にも内容は伝えてある

それなりの信用のある人にも相談はした

時には街全体に向かつて泣き叫んだこともある

それなのに、私は一向に助けられる気配はないようだった

「腐った街が . . . 」

思わず、レイプ犯にすら言つた事がないような呪詛が漏れ出る

それは、もしも私が言葉だけで人を殺せるのなら、少なくとも約5

千人の人間が確実に死に至るくらいの恨みを込められているに違いない

でも、それも当然

私はこの町では、もうとっくに人間ではなくなっているのだから

この町は、閉鎖されている

それはもちとん物理的な意味ではなく、人間のあり方がとことんまで閉じられているということ

例えば、10分前にあつた出来事が10分後には町内全てに行き渡り、仮に誰かが一般的には重大な犯罪を犯しても、それが街の信用を汚すことになるのなら、街中で問題をにじり潰し、警察の手が及ぶ前に事を処理してしまう

いやそれどころか、仮に警察が問題を取り上げても、それすらも警察内部で不問にされてしまうなんて有様なのだ

これを腐っていると言わず何と言つ

排他的で自衛的

問題を問題とせず、全てを内々に封じ込めてしまおつといへゴリ社会

誰もが幸せで、誰もが糞以下であることを望んでいる、歪み切った死人世界

だから私から見てしまえば、それは全く比喩的な意味でなく、あたかも町の周囲には数十メートルの壁によつて覆われているのと何も変わらない

結局私は、この街からは逃げ出せないし、他の誰の助けも期待できない

いつだつて世界は私の敵で、びつなつても私は世界に疎んじられているのだ

なら、もつ他のびつよつもないじやないか ・・・

「本当、びつじよつも ・・・ ない ・・・」

「何がびつじよつもない?」

え?

その声に、定まつていなかつた焦点が急速に世界を映し出す

すると私の目の前には、一人の男子が、悠然と立ち塞がつていた

「 ・・・ びつした?」

恐らく、私のボロボロの恰好を見て言っているのだろう

その男子は、一瞬だけ私の制服に目をやつた

「 . . . 別に」

私は答えない

だつて、意味が無い

仮に今あつたことを包み隠さず言つたといふで、それは何の解決にもならないのだ

だから私は、最初から他人の助けなんて求めない

「 そつか」

その男子は淡々とした口調で言葉を返してくる

何の哀れみも同情も、怒りも喜びも感じさせずに、言葉を使っていた

「 . . . 少しだけ気になった

何故なら私は、その人の声と表情を見れば、その人物の考えていることが大抵読めるからだ

今までだつてそれが通用しないことなんて殆どなかつたし、私自身この無駄な素養には自信を持っている

にも関わらず、私にはこの男子の考えていることが読めなかつたのだ

私は、微妙な悔しさと共に改めて男子の姿を確認する

「…………」

その顔には、何となく見覚えがあつた

確かに前に一度、どこかの不良グループと対立していた二人組みの一人よくは知らないが、確かにこの周辺の街ではそれなりに顔が通つてゐる高校生だつたはずだ

制服、襟章から判断するに今は新宮高校の3年生か

そう言えば前に馴染みの定食屋で2回ほど見かけたことがあつたかもしぬれない

その時は何人かの仲間と一緒に來ていて、何の職に就くかで話していたような気がする

うる覚えだが、食べていたのはナポリタン

そんな幾つかの記憶が、芋づる式に蘇つてきた

なのに……

結局、私にはその男子が何を考えているのか、まるで検討が付かなかつた

「こんなことは、初めてだ . . .

( . . . って、だからどうしたって言ひのよ )

そんなことは私にとって何の関係もないし、意味もないじゃない  
この人の思考が読めなくて別に私が困ったりなんてしないし、仮  
にこの人が腕が立つたとしても、それが結果として私にどう影響す  
るわけでもない

だつて所詮この人は、ただの一介の男子高校生なのだ

つまりそれは、私にとっての無関係といつこと

なら、どうでもいいじゃないの

「用が無いなら、これで . . .

私はその人の横を通り過ぎる

その間も彼は微動だにせず、ただ私が自分のすぐ右を通過するのを  
待つていただけだった

「はあ . . .

ようやく彼を後ろに出来て息を吐く

私は、何故だか妙に疲れた気分になつて、気付けば歩みまで鈍くな  
つていた

まったく、一体何だつて言うんだらう

正直、今日はもうこれ以上私を疲れさせないで欲しいのこ、何でこの人は私を困らせるんだろう

そう思つていると不意にその男子は

「一つ答える。今お前をやつた連中の一人に赤い髪のデブはいたか？」

そんな質問を私に向かって投げかけてきた

「は？」

自分でも思わずそんな疑問符を返しつつも、私の頭の中ではその問い合わせがYESであることが示されしまつ

ああもうつ私も、何で答えなんて出してしまつてているのか

「いたか？」

「知らないわよ。そんなこと」

振り返らずに答える

正直、これ以上こいつに関わりたくない気持ちで一杯だった

だってどひしてだが、こいつを見ているとイライラが募つてくる感じがしてくるのだ

もう思いつきり『いい加減私に構わないでよつー』と叫びたい気持  
ちにさえなつて いるほどに

「 そ う か。 分 か つ た 」

「 え ? 」

そ の 答 え に 、 私 は 暄 喧 に 振 り 向 い て い た

自 分 で も よ く 分 か ら な い の だ が 、 何 と な く 振 り 向 か ず に は い ら れ な  
か つ た の だ

本 当 、 疑 問 符 が 絶 え な い

見 る と 、 彼 は す た す た と そ の 場 か ら 離 れ て い く

ど こ を 目 指 し て い る の か は 分 か ら な い が 、 何 故 だ か そ の 歩 み が 微 か  
に 急 い で い る よ う に 思 わ れ た

同 時 に 、 私 の 心 の 中 に は 、 妙 な 恐 怖 感 が 込 み 上 が つ て き て い る こ と  
に 、 私 は 気 付 い て い た

その恐怖感が的中したこと知ることになった

学校が終わつて、私が高校の外に出ようとすると、突然

「ゐなせ」

という声と共に、何かが入っているコンビニの袋を放られたのだ

「わつと！」

私はあまりの不意打ちに今まで余り出した事の無いような声を発しながらも、その袋を受け取つてしまつ

そしてすぐに、私に袋を投げつけてきた輩が「中身は好き」にしり」と言葉を続けていた

私はもう何が何だか分からずに、けれどようやくその輩が昨日私を疲れさせた男子高校生であると気が付く

すると男子高校生は、私が文句を言つ前に顎でしゃくつて一中を見ろ」と要求してきた

۱۷۷

本当に、何て気に障る奴なんだろうと腹立たしくなつてくる

何なのよもう

私は瞬間に怒りと疲労感を覚えながらも、言われた通りにビール袋の中を確認してみた

「 . . . え？」

正直、驚くより他に無かった

いやもう見ただけで血の気が引いた

血の気が引く、というか恐怖感に身を震わされるほどだった

だつて . . .

だつてそこには . . .

「写真 . . . と、ネガ . . . ？」

そう . . .

そのただの白い袋には、私が今まで撮られたであろうレイプ中の  
「写真とネガが『全て』

本当に『全部』が . . . 入っていたのだ

「う、そ . . . 」

理解できなかつた

とにかく理解できなかつた

ただ、どうしても意味が分からなかつた

別に、私の醜態の全てがそこにあつたからじゃない

どうやってそれらを集め切つたのか、などといつ疑問でももちろん

ない

ただ、理解できなかつたこと・・・それは・・・

「・・・何で?」

何で、私を・・・

私なんかを・・・?

「一つ、覚えておけ

彼は、私が聞きたい」とを心中で呟くより先に、私に向かつて言葉を告げる

「お前は、俺の側にいる。いいな」

瞬間的に、私は答えを出していた

殆ど無意識にとてて言つてしまつて、あつとこいつ間に答えを出していた

「・・・はい」

それはもはや本能と言つてもいいくらいのもので

それはもはや、私の人生における答えを見つけたと言つてしまつて

もこいもので

今まで私に起きていた全でが、どうでもよくなってしまつてしまつへりこ  
衝撃的なもので

安堵感に、満たされていて . . .

だから彼になら . . .

彼になら、私の全てを委ねられると、やう . . . 理解していた . . .

その日から、私の本当の意味での地獄が始まった

## 第一話 歪な私は悪魔の彼に捕まつた（後書き）

今回初めて投稿することにしました

しかもろくに取材してない形での文章作成に我ながら冷や汗ダラダラ状態です（汗）

まだ全然話が練られてなくて、一話分しかかけておりませんが、どうぞ気長に待つていただけると幸いです

それではどうぞ『歪な私は悪魔の彼に捕まつた』をよろしくお願ひします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0476p/>

---

歪な私は悪魔の彼に拘った

2010年11月21日15時59分発行